



2022年 第38回写真の町東川賞

受賞者発表
授賞式及びフォトフェスタ案内

写真文化首都
北海道「写真の町」東川町

第38回 写真の町東川賞受賞作家

＜海外作家賞＞ 対象国：ベトナム

ハ・ダオ氏 (Ha Dao)

受賞理由：『The Mirror』(2016-2017 年)、『Forget Me Not』(2017 年)、『All Things Considered』(2019 年) など、一連の作品に対して

＜国内作家賞＞

たかの りゅうだい
鷹野 隆大氏 (TAKANO Ryudai)

受賞理由：写文集『毎日写真』(ナナロク社、2019 年)、展覧会「毎日写真 1999-2021」(国立国際美術館、2021 年) に対して

＜新人作家賞＞

ささおか けいこ
笹岡 啓子氏 (SASAOKA Keiko)

受賞理由：小冊子シリーズ『SHORELINE』(KULA、2015 年～継続中)、写真集『Remembrance 三陸、福島 2011-2014』(写真公園林、2021 年) に対して

＜特別作家賞＞

エレナ・トゥタッチコワ氏 (Elena TUTATCHIKOVA)

受賞理由：二人展「Land and Beyond | 大地の声をたどる」(ポーラ ミュージアム アネックス 2021 年) ほか、知床における一連の作品に対して

＜飛弾野数右衛門賞＞

みやざき まなぶ
宮崎 学氏 (MIYAZAKI Manabu)

受賞理由：展覧会「イマドキの野生動物」(東京都写真美術館、2021 年) などにおける、長野県駒ヶ根を拠点とした一連の作品に対して

第38回 写真の町東川賞審査会委員 (敬称略／五十音順)

安	珠	(あんじゅ)	写真家
上野	修	(うえの おさむ)	写真評論家
神山	亮子	(かみやま りょうこ)	学芸員、戦後日本美術史
北野	謙	(きたの けん)	写真家
倉石	信乃	(くらいし しの)	詩人、写真批評
柴崎	友香	(しばさき ともか)	小説家
丹羽	晴美	(にわ はるみ)	学芸員、写真論
原	耕一	(はら こういち)	デザイナー

第38回 写真の町東川賞審査講評

第38回写真の町東川賞審査会は、2022年3月2日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞62名、新人作家賞73名、特別作家賞25名、飛弾野数右衛門賞38名、海外作家賞12名。例年どおり、午前中は写真集や資料をじっくりと閲覧し、午後から、審査委員8名が、合計169名の作家より5つの賞を選ぶ審査に入った。

国内作家賞は、最終段階で5名に絞り込まれた。甲乙つけ難い、まるで異なった表現が最終段階に残り、審査委員が悩みに悩むのは毎年の光景でもある。丁寧に議論と投票を繰り返した結果、鷹野隆大氏に決定した。毎日撮るから「毎日写真」という明快な行為から展開されていく複雑な批評性は、独創的かつ魅力的だ。初の大規模な個展となる『毎日写真1999-2021』や、写文集『毎日写真』における、制度化された眼差しへの問いかけ、写真という媒体をめぐるしなやかな思考が大きく評価された。

新人作家賞は、今年も混戦かつ激戦となった。議論と投票を繰り返し、最終的に、菅実花、笹岡啓子、林典子の三つ巴の接戦となり、笹岡啓子氏が選ばれた。2014年以降の三陸、福島 of 被災地域を中心に、日本各地の海岸線や海の記憶を持つさまざまな地域を交え、順次刊行されている小冊子シリーズ『SHORELINE』、2011年以後、東北地域を幾度も訪ね、撮影を続けた『Remembrance 三陸、福島 2011-2014』における、まさに写真ならではの強度に満ちた作品の説得力が評価された。

特別作家賞には、2014年8月に東川町国際写真フェスティバルに参加した後、はじめて知床を訪れ、それ以来、さまざまなかたちで知床におけるフィールドワークを続けてきたエレナ・トゥタッチコワ氏が選ばれた。二人展『Land and Beyond | 大地の声をたどる』などに結実した、身体と思考と土地との関わりの重層的なプロセス、そこから広がっていく表現は、北海道をテーマ・被写体とした作品を対象とする特別作家賞の規定にふさわしいものであるといえよう。

飛弾野数右衛門賞に選ばれたのは、中央アルプスの麓である長野県上伊那郡南向村（現・中川村）に生まれ、自然豊かな環境を生かしながら、野生動物の撮影において独創的な写真表現を切り拓いてきた、宮崎学氏である。展覧会「イマドキの野生動物」では、作家活動の軌跡と作品の社会性が浮かび上がって

いた。長年にわたり地域を撮り続けた作品を対象とする飛弾野数右衛門賞に、また新たな広がりが生まれたことを喜ぶたい。

海外作家賞は、菅沼比呂志氏の入念な調査に基づいた説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国のベトナムから、ハ・ダオ氏が選ばれた。カメラを使って世界と自分自身を定義する ジェンダー、アイデンティティといった概念、文化の変化について考察している『The Mirror』『Forget Me Not』『All Things Considered』といった一連の作品、キュレーターでもある意欲的な活動がトータルに評価された。

緊急事態宣言下での開催となった昨年に続き、今年は、まん延防止等重点措置下の開催となり、感染症対策として、マスクをつけての審査となった。1985年に「写真の町宣言」、2014年に「写真文化首都宣言」というマニフェストを掲げた東川町の、文化的な活動は不要不急ではないという力強い姿勢によって、コロナ禍においても例年同様の審査を行うことができた。東川町国際写真フェスティバルにおけるセレモニーやイベントが毎年のクライマックスとなるが、それが可能になっているのは、東川町の人々の日常における多大な努力と共感があってのことである。このことを胸に深く刻みつつ、心より感謝申し上げたい。

写真の町東川賞審査会委員 上野 修



第38回写真の町東川賞 <海外作家賞>

ハ・ダオ (Ha Dao)

ベトナム社会主義共和国・ハノイ在住

1995年、ベトナム・ハノイ生まれ。カメラを使ってジェンダーやアイデンティティなど自分自身を定義する概念、ベトナム文化の変化について考察している。

最初にカメラを向けたのは当時の恋人。クィアな女性として、何を秘密にし、何を世に問うべきかを激しく議論してきた二人の関係と取るに足らない暮らしぶりの細部を記録し、「The Mirror」として発表。その後、カンボジアのシェムリアップのサービスガールを追った「Forget Me Not」、インド・コルカタの男性レスラーのポートレート「Hardboiled」、ベトナムの少数民族をドキュメントした「Red Dust」など、外の世界に入り込み、その地の人々のポートレートを通してジェンダーやセクシュアリティ、複雑な社会構造や、民族、文化ということを考察している。制作中の最新作「All Things Considered」では、現代のベトナム社会で写真がどのように記憶や歴史を構築していくかを探っている。法医学的な視点で写真を用い、正当防衛で夫を殺害した女性の視点から殺人事件を再考し、カメラという機械的な道具を使い、私たちが見ることができた／できなかったイメージを視覚化し、重層的で思索的な作品の制作を試みている。

主なグループ展に「アジアの女性写真家のショーケース」(Objectifs Centre for Photography & Film, シンガポール、'17年)、「セカンドオピニオン ～ハノイの新しい写真」(マンジアートスペース、ハノイ、ベトナム、'18年)、「洞察～アジアの女性写真家展」(謝之龍博物館、長沙、中国、'18年)、「破壊の彼方へ」(VICASアートスタジオ・ベトナム国立文化芸術研究所、ハノイ、ベトナム、'19年)などがある。日常生活で起こる奇妙な出来事からインスピレーションを受け、想像力豊かなアプローチでドキュメンタリーを制作し、緻密な観察と豊かな連想のもとに構成された作品を発表している。

また、'17年より、ベトナムの現代写真の動向を伝える非営利のオンライン雑誌「Matca」の編集長を務める。写真家や写真ファン、研究者、批評家向けに、英語とベトナム語のバイリンガルで、写真に関する200タイトル以上の記事を紹介し、アーカイブしている。

<作家の言葉>

第38回写真の町東川賞海外作家賞の受賞者に選ばれたと聞き、椅子から転げ落ちそうになりました。アート作品を作り始めてからまだ少ししか時間が経っておらず、未だ写真との関係性を今この瞬間も見出そうとしています。そんなまだあまり知られていないベトナム出身の若い写真家として、このような名誉ある賞をいただけたことに、最初こそ戸惑いましたが、心から嬉しく思っております。

私は以前から日本の写真、特に同じ東川賞を受賞した川内倫子、志賀理江子、長島有里枝(敬称略)などの女性作家作品のファンでした。彼女達の作品のおかげで、私は女性が自分らしく生きた経験や優しさを楽しむことができ、また単に記録するだけではなく想像するためのカメラの力を理解することができました。これは最も重要なことであり、男性が優位な職業であるという固定概念がある以上、簡単なことではありません。言うまでもないことですが、彼女達と同じ場所に共に立てたことを非常に光榮に感じています。

私は正式な芸術教育は受けていませんが、自分自身を独学の写真家だとは決して思いません。この素晴らしい機会をお借りして、私のような若い声を取り上げるためにたゆまぬ努力を続けてこられた私の師や独立系機関の皆様—ジェイミー・マックストーン・グラハム、アンコール・フォト・フェスティバル、ジュアン・ウービン、マンジアートスペース、ヘリテージスペース、そして最後にMatcaの素晴らしい仲間達—に感謝いたします。すべて私の出身地であるハノイのローカルアートコミュニティのおかげであり、この恩を次に送れるよう私にできる限りのことを続けて参ります。

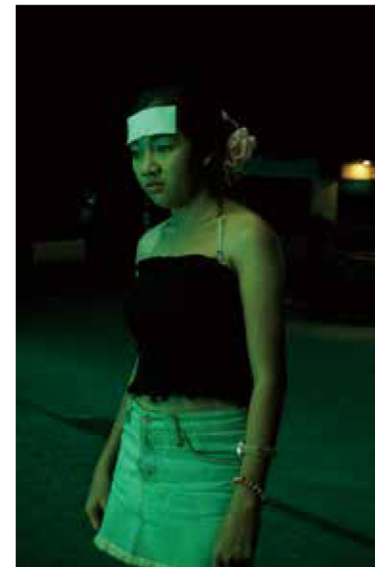
ハ・ダオ



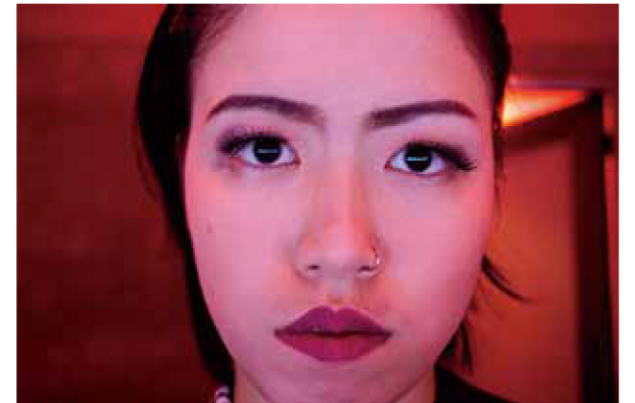
from the series "All Things Considered"
2019



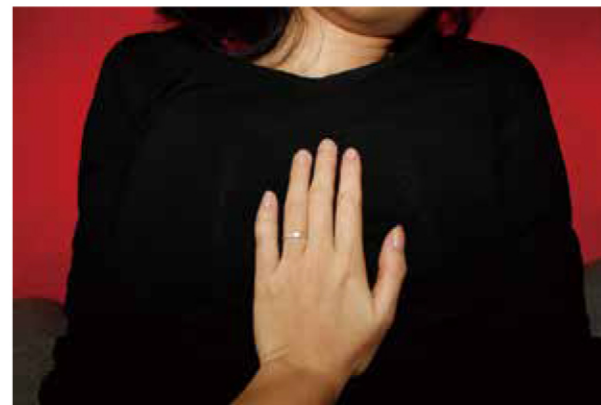
from the series "All Things Considered"
2019



from the series "Forget Me Not"
2017



from the series "Forget Me Not"
2017



from the series "The Mirror"
2016



from the series "The Mirror"
2016



第38回写真の町東川賞 <国内作家賞>

たかの りゅうだい

鷹野 隆大 (TAKANO Ryudai)

東京都在住

1963年福井県生まれ。'87年早稲田大学政治経済学部卒。セクシュアリティをテーマに'94年より作家活動を開始。

女か男か、同性愛か異性愛かといった二項対立の狭間にある曖昧なものの可視化を試みた写真集『IN MY ROOM』（蒼穹舎、'05年）で、'06年に第31回木村伊兵衛写真賞を受賞。'98年より、毎日欠かさず撮ることを自らに課したプロジェクト「毎日写真」を開始、現在まで続けている。その中から日本特有の無秩序な都市空間を、所謂カスのような場所、略して“カスバ”とし、それを複数形にした造語をタイトルにして編んだ写真集『カスババ』（大和プレス、'11年）を発刊。その後、東日本大震災を機に、都市や空間、写真というメディア、人間の視覚ということについて、あらためて問い直すことになる。そこから古典技法や動画などを使い、影をテーマに種々の作品制作に取り組み始める。

'19年には写真、性、文学についてなど幅広い題材について写真作品とともに綴った、初となるエッセイ集『毎日写真』（ナナロク社、'19年）を上梓。近年の主なグループ展に『愛すべき世界』（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、'15-'16年）、『シンクロニシティー平成をスクロールする 秋期』（東京都写真美術館、'17年）などがある。'21年には、総枚数が10万枚にもなろうとしている「毎日写真」から選出した写真を中心に、ジェンダーやセクシャリティなども含め、これまでの活動の軌跡を追った大規模な個展「毎日写真1999-2021」（国立国際美術館、大阪、'21年）を開催。見ることは何かを観客に問いかける展示空間も話題となった。'22年、第72回芸術選奨文部科学大臣賞（美術部門）受賞。

また、'10年には同世代の写真家鈴木理策、松江泰治、評論家の倉石信乃、清水穰らに呼びかけ「写真分離派」を立ち上げ、21世紀に入り大きく変化する写真のあり方を、対談や展覧会を通して記録し、『写真分離派宣言』（青幻舎、'12年）にまとめる。

様々な角度から視覚における価値のヒエラルキーや、写真という媒体の特性について日々考察を重ねている。

<作家の言葉>

実は東川町の写真フェスティバルには数年前まで毎年通っていました。この賞とは別の部門で審査を担当していた関係です。初年は東日本大震災のあった年で、様々な混乱を引きずる中、東川町の方々の温かいおもてなしに気持ちが和らいだことを今もはっきり覚えています。夏の夕暮れ、普段あまり話す機会のない方々と取り留めのない雑談をしながら過ごした時間は、贅沢な思い出となっています。このフェスティバルには場としての豊かさがあります。そしてその豊かな土壌の中から「写真の形」を問い続けてきたのがこの賞だと思います。

現在、写真の輪郭が急速に崩れています。しかしこのような状況だからこそ、わたしの地味な活動が評価されたのだと考えています。わたしはこれまで、人々の思考に影響を及ぼし続ける写真というものについて実践面から探求してきました。今回、写真について考えることの意義と勇気を改めて与えていただいたことに深く感謝しています。

鷹野隆大



赤い革のコートを着ている

「IN MY ROOM」シリーズより

2002

©Takano Ryudai, Courtesy of Yumiko Chiba Associates



2013.03.02.M.#e08

2013

©Takano Ryudai, Courtesy of Yumiko Chiba Associates



2018.03.03.D.#02

「Green Room Project」シリーズより

2018

©Takano Ryudai, Courtesy of Yumiko Chiba Associates



2011.03.11_T

「東京タワー」シリーズより

2011

©Takano Ryudai, Courtesy of Yumiko Chiba Associates



2017.09.23.#12

「カスババ2」シリーズより

2017

©Takano Ryudai, Courtesy of Yumiko Chiba Associates



2018.11.14.#05

「毎日写真」シリーズより

2018

©Takano Ryudai, Courtesy of Yumiko Chiba Associates



第38回写真の町東川賞 <新人作家賞>

笹岡 啓子 (SASAKA Keiko)

東京都在住

1978年、広島市生まれ。'02年、東京造形大学卒業。広島に育ち、街を離れたことから、歴史的な街（広島）の内側と外側を見つめる。その経験が、多くの作品に影響を与えている。

日本各地、津々浦々を歩き、長い時間をかけ隆起と変動を繰り返してきた海岸線と釣り人を写した「Fishing」で「VOCA展2008」VOCA奨励賞受賞。'01年から広島平和記念公園とその周辺を撮影し、'09年に刊行した写真集『PARK CITY』（インスクリプト、'09年）で、'10年度日本写真協会賞新人賞を受賞。8名の写真家の東日本大震災をテーマにした作品を紹介した「ニコンサロン連続企画展『Remembrance 3.11』」（銀座／大阪ニコンサロン、'12年）で、「Difference 3.11」を発表。写真から見られる被害のあり方の違いや、それぞれの地域の地理的な差異と同時に、思い出し続けることが大事だという想いを示し、'12年にさがみはら写真新人奨励賞を受賞する。その後、東日本大震災後、福島を含めた被災地域などの風景を収めた不定期刊行の小冊子『Remembrance』（KULA、'12-'13年、全41号）で、第23回林忠彦賞（'14年）を受賞。'15年からは東北の被災地域だけでなく、日本各地の海岸線や海の記憶をもつさまざまな地域を撮影した後続シリーズの小冊子『SHORELINE』（KULA、1〜42号）を刊行し、展覧会とあわせて発表を続けている。

'01年にスタートした写真家たちによる自主運営ギャラリー「photographers' gallery」には設立当初から関わり、レクチャーの開催、機関紙や写真集の発行、エッセイ、批評などの発信など、多岐に渡る活動を行っている。機関紙『photographers' gallery press』の編集にも携わり、第12号（'14年）では編集責任として広島の前爆写真を検証・考察する「爆心地の写真 1945-1952」を特集した。震災の復興へと向かう現在進行形の場所に撮ることで向き合う一方、初期からのテーマである海岸線や火山など、地勢や地表が刻むその土地の過去や経過にも関心を寄せ、写真を通した様々な試みを続けている。

<作家の言葉>

2010年の東川町フォトフェスタを訪れたことをきっかけに、はじめて旭岳に登りました。以来、大雪山の荘厳な佇まいに魅了された私は、幾度か再訪し、日本各地の山々へも向かうようになりました。翌年起こった東日本大震災により、それまで自分のメインフィールドでもあった海岸線は別の貌を持つ場所であったことに気づかされ、以降頻発する数々の自然災害のたび、この列島で生きることがいかに脆く危ういことかを思い知らされています。震災から10年を経た今年、自然と共に生きることの困難と礼賛とを教えてくれた東川町の写真新人賞をいただけることはひととき感慨深く、身に余る光栄です。同時にこの10年余りの列島の姿が部分的であっても写真として後世に残され、僅かでも未来に役立つとすればこのうえない喜びです。

笹岡 啓子



「Remembrance」より

2011



「Remembrance」より

2011



「Remembrance」より

2011



「Remembrance」より

2013



「SHORELINE」より

2011



「SHORELINE」より

2019



第38回写真の町東川賞 <特別作家賞>

エレナ・トゥタッチコワ (Elena TUTATCHIKOVA)

京都府在住

1984年、ロシア、モスクワ生まれ。チャイコフスキー記念モスクワ国立音楽院附属中央専門音楽学校で音楽を学んだ後、ロシア国立人文大学東洋文化・古典古代学部で日本文学を専攻。2012年来日。2020年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。

さまざまな土地で歩き、人々と関わりながら、その土地に秘められた物語を採取し、写真のみならず、映像、文章、ドローイング、音など様々なメディアを使って表現を行う。

「林檎が木から落ちるとき、音が生まれる」で、2014年の東川町国際写真フェスティバル「赤レンガポートフォリオオーディション」のグランプリを受賞。

人間や動物が作り出す様々な道を知識や知恵の源泉と捉え、住民と旅行者とともに知床半島を歩く「シレットコ・ウォーキング・プロジェクト」を2017年に立ち上げ、知床の自然や歴史を体験し、歩くことによる思考を実践している。

何度も知床を訪れ、現地の人々と関わりながら浜辺や森を歩き、風景を観察する。その地の植物や動物、土や水などから発せられるものに耳を傾け、時間や空間を超えた作品に昇華させている。今回の受賞対象となる知床半島での一連の作品を、二人展「Land and Beyond | 大地の声をたどる」(ポーラ ミュージアム アネックス、東京、2021年)などで発表している。

作品集に『林檎が木から落ちるとき、音が生まれる』(torch press、2016年)。近年の主な個展に「Days With the Wind | 風の日は島を歩く」(高松アーティスト・イン・レジデンス'20、女木島、高松市、2021年)、「道は半島をゆく」(知床半島内複数会場、2018年)、「On Teto's Trail」(Gallery Trax、山梨、2017年)、グループ展には「FACES」(SCAI PIRAMIDE、東京、2021年)、「茨城県北芸術祭」(2016)などがある。

<作家の言葉>

知床へ通い始めてから、今年で8年になるのだが、その旅は、初めて北海道、東川を訪れた後に始まった。なぜ同じ場所に繰り返し何度も行かなければならないのか。知床という場所はわたしにとって、滞在するたびに生きることについて本質的な何かを教えてくれる場所だ。

わたしは知床で出会った人、動物、植物、水、森、道に教えてもらったことを、写真、映像、ドローイング、言葉などの形で表現してきた。何度も歩き、考えて、感じて、経験し、他者と関わるプロセスのなかで、土地の詩学が表れてくる。

知床は自分にとって、この終わりのないプロセスのなかで、人間として、アーティストとして、どう土地と人と関わりたいか、いま生きる世界に対して何ができるかを確認する場所でもある。

大きな問いへの答えを探し続け、日々の小さなことと向き合いながら、たねを撒き、考え続け、歩き続けて、土地の物語を紡いでいきたい。

エレナ・トゥタッチコワ



「ひつじの時刻、北風、晴れ」より
from the series "Hour of the Sheep, North Wind, Sunny"
2015



「ひつじの時刻、北風、晴れ」より
from the series "Hour of the Sheep, North Wind, Sunny"
2018



「ひつじの時刻、北風、晴れ」より
from the series "Hour of the Sheep, North Wind, Sunny"
2018



「ひつじの時刻、北風、晴れ」より
from the series "Hour of the Sheep, North Wind, Sunny"
2018



"Drift Ice: Minehama, March, 2018" より
2018



知床：地図と落書きと言葉とほかの資料
Shiretoko: maps, doodles, words and other materials
2015-2021



第38回写真の町東川賞 <飛弾野数右衛門賞>

宮崎 学 (MIYAZAKI Manabu)

長野県在住

1949年長野県生まれ。中学卒業後に働きはじめた企業で、カメラやレンズに触れ、写真の魅力にとりつかれる。17歳で「アサヒカメラ」のコンテストに初めて応募し、初入選。以来、応募を繰り返し、独学で写真を学ぶ。

’72年、平凡社の雑誌「アニマ」の創刊準備で訪ねてきた編集者に認められ、23歳にして専属契約をする。以後、日本に生息する鷲と鷹、全16種類を撮影することを目標に、北海道から沖縄までを旅し、15年の歳月をかけ完遂。この過程で沖縄八重山諸島に生息するカンムリワシの営巣を初めて発見。これらを写真集『鷲と鷹』（平凡社、’81年）にまとめ、’82年に日本写真協会賞新人賞を受賞。また、この頃、赤外線センサー付のロボットカメラを独自開発し、野生動物の知られざる世界を撮影した写真集『けもの道』（共立出版、’79年）を発表。さらに、撮影が最も難しいと言われる夜行性のフクロウの撮影に挑戦。姿を現さない野生のフクロウの生活パターンを調べ、行動を先読みするべくロボットカメラをアップデート。10年がかりで撮影に成功し、写真集『フクロウ』（平凡社、’89年／『The Owl』Chronicle Books, USA、’90年）を出版。’90年には自然をテーマとする写真家として初めて第9回土門拳賞を受賞。その後、死を語ることを避ける現代社会に疑問を感じ、あらゆる生命には誕生の数だけ死の数もあると、死体が土に還るまでを描いた仏教絵画「九相図」をモデルに野生動物の死を表現した写真集『死』（平凡社、’94年）を出版し、’95年に日本写真協会賞年度賞を受賞。さらに、野生動物たちからの視線で人間社会を逆照射しようと’94年より『FRIDAY』（講談社）で連載を開始。それらをまとめた『アニマル黙示録』（講談社、’95年）で’95年に講談社出版文化賞「写真賞」を受賞。これまで、写真集をはじめ単行本など70冊以上を出版。展覧会は、ニコンサロンをはじめ、IZU PHOTO MUSEUM（’13年）での個展、カルチェ現代工芸美術館（’16年）でのグループ展等多数。’21年、東京都写真美術館では、半世紀近くに渡る“自然界の報道写真家”としての軌跡をまとめた「イマドキの野生動物」を開催。

<作家の言葉>

東川賞「飛弾野数右衛門賞」の知らせにビックリした。

このような写真の賞があることを正直知らなかったからだ。調べてみたら、地道にコツコツと長年に渡ってテーマを追い続けている人に与えられる賞であることがわかった。

自分は長野県の片田舎に暮らして自然環境と人間をテーマに撮影しているが、あくまでも自然という相手側から人社会と生命というものを目撃しながら作品制作を続けてきた。ある意味自分の興味のあるところだけをじっくり見つめマイペースで作品づくりをしているからである。

今回このような賞が自分に届いたということは、全国の地方で対象物を地道に深く丁寧に追求しているプロ、アマはたくさんいると思うので、みんなに勇気と希望を与えるものとなるにちがいない。古希を迎えた自分だが、この賞を「がんばりま賞」と位置づけ、今後もさらに視点に磨きをかけ残されたテーマに邁進したいと思う。

このような田舎者の自分を探しだしてくださった審査員の皆様に心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

宮崎 学



「墓地で供物を盗むニホンザル」

2010



「鳥インフルエンザに怯える社会」

2012



「都市夜景脇で隠密行動中のアライグマ」

2013



「ニホンジカを食うツキノワグマ」

2013



「洗剤キャップをマイホームするヤドカリ」

1994



「シカの死を確認するカケス」

1992

「イマドキの野生動物」より

第38回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業2022～

<受賞作家作品展>

会期：7月30日（土）～8月30日（火） 会期中無休

時間：10：00～17：00（7月30日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円（7月30日、31日は無料開放）

海外作家賞…………ハ・ダオ

国内作家賞…………鷹野隆大

新人作家賞…………笹岡啓子

特別作家賞…………エレナ・トゥタッチコワ

飛弾野数右衛門賞……宮崎学

●7月30日（土）

13：30～14：30 授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット（会場：東川町文化ギャラリー）

15：30～17：00 レセプション「受賞を祝う集い」

●7月31日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査会委員、ゲスト

※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、事業が変更・中止・延期となる可能性がございます。

■■■■ 写真の町とは ■■■■

1984年、東川町に開墾の鍬がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川町は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、この若い町よりも、わずか半世紀ほど早く生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル」（通称：東川町フォトフェスタ）が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末から8月頭に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やフォーラム、東川賞歴代受賞作家屋外写真展、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えていきます。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる「全国高等学校写真選手権大会」(通称:写真甲子園)では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し、「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意するものです。

■■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■■

●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞

写真の町東川賞＜海外作家賞＞	1名	賞金 100万円
写真の町東川賞＜国内作家賞＞	1名	賞金 100万円
写真の町東川賞＜新人作家賞＞	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞＜特別作家賞＞	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞＜飛弾野数右衛門賞＞	1名	賞金 50万円

●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作家を、東川町長が委嘱した委員で構成する「写真の町東川賞審査会」において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念フォーラム等を開催します。

●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、「写真の町・東川町文化ギャラリー」に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的的發展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。



フォトフェスタHP

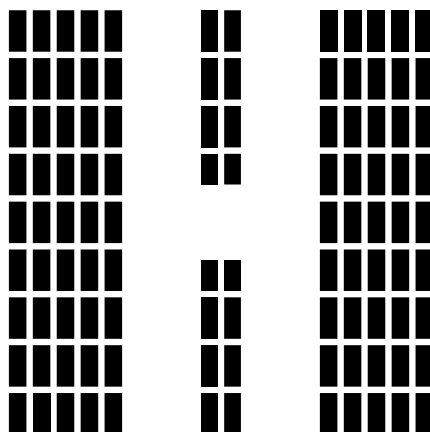
東川町 HP <https://town.higashikawa.hokkaido.jp/>

フォトフェスタ HP <https://photo-town.jp/>

 https://twitter.com/Higashikawa_PF

 <https://www.facebook.com/Higashikawa.PF/>

 https://www.instagram.com/higashikawa_pf/



〈お問い合わせ先〉

写真文化首都 北海道「写真の町」東川町

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー内
東川町役場 写真の町課（担当：竹田・吉里）

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

E-mail: photo@town.higashikawa.lg.jp

<https://www.photo-town.jp/>

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家作品展出品作に限られません。